

でんでん通信 第百三十七号 平成二十九年五月

坐禅会

今月は、五月三十一日(水)午前十時より坐禅会を行います。従来の週末ではなく、平日となりますのでご了承ください。みなさんのご参加をお待ちしております。

日帰りバス旅行

今年も日帰りでバス旅行に出かけます。行先は本山妙心寺と嵐山方面です。妙心寺派の檀信徒であれば、一度この機会に本山参りに是非ご参加ください。詳細は別紙にて案内募集します。

日時 平成二十九年七月三日(月)

参加料 一万円

参加申込締切 六月二十日

申込先 禅林寺

うまかった甘酒は

鎌倉建長寺の菅原時保老師は「今良寛」といわれた近代の名僧でした。その時保老師のお話。

——わしは小さい時に寺にもらわれて、まだ十歳にもならん頃だったかなあ。檀家さんが亡くなられて葬式の後の七日七日にお経をあげに行かされた時だった。貧しい農家だったが、ありがたい、ありがたいといっておかみさんが、真心こめて小僧のわしを歓待してくれた。三、四回目のときだったかな。お経を読み

だしたら、おかみさんがわしにご飯をこちそうしようとして台所へ行かれた。仏間にはわしとハイハイしていた赤ちゃんがいた。ろくなおもちゃもない時代だったから、おしゃぶり代わりにしゃもじを与えられていた。そのうちその赤ちゃん、むずかり出し、しゃもじをポイと投げて泣き出した。お経を読みながら横目でチラとみると、赤ちゃん、おしっこを垂れて板の間に水たまりができて、その小便のたまりにしゃもじがひたつている。やがてごはんが炊き上がり、おかみさんは小便のかかったしゃもじを取って、釜からおひつにご飯を移しはじめた。そのおかみさん風邪をひいているらしく、ご飯の上に時折鼻汁を落としている。

こりや、えらいことになったぞ。

わしはお経を読みながら気が気でなかった。

お経が終わると、おかみさんが、

「お小僧さんにお経をあげてもらって、とうちゃん、どんなに喜んでるやろ。さあ、さあ、何も無いけど、

ごはんだけはたくさんあるから・・・」

「あおう、今日はおなか痛くて・・・」

わしはさも痛そうに顔をしかめて言った。

おかみさんは、

「少しくらいはいいだろうよお」

と何度も勧められたが、どうにか断ってほうほうのいで寺に帰った。

それから七日経ってまたお経をあげに出かけた。

今度は赤ちゃん、昼寝をしていて、おかみさんも風邪が治っている様子。

よし、今日はたらふく頂こう

と心も弾んでお経を唱えた。

お経が終わったら、おかみさん、甘酒を持ってきた。うまい甘酒だったので、勧められるままに何杯もおかわりをした。おかみさんは大変喜んでくれ、

「お小僧さん、この前来たときごはんを食べてくれなかったものだから、ごはんが余って困っただよ。それだな、そのごはんで甘酒を仕込んだんだよ。おかわりまでしてくれてありがとう・・・」

うえー、あの小便ごはんで作った甘酒!

途端に吐き気がしたがもうあとのまつりさ・・・

わしは甘酒をみると今でも思い出すんだよ・・・

ここまで話す時保老師は、ポツリとひと言、ひとり

言のように呟いた。

「頂戴しなくちゃならんものは、頂戴しなくちゃならんようにできているんだよ」と。

この笑い話こそ、時保老師が生涯をかけて精進した禅話であり、最後の一句こそ「一句は一代の力なり」でしょう。良寛様の「災難に逢うときは逢うがよくそろうろう。死ぬる時節は死ぬるがよくそろうろう」に通じるものがあります。

人は生まれたら、人としての苦しみ、悩みが生まれてきます。避けては通れません。そんな悩みや苦しきとしっかりと向き合い、乗り越えていく。そして一日一日とお迎えがくる日へとむかっていきます。そんなお迎えがくる日までをいかに充実した時間として過ごすか、悔いのない人生を送ることができか、人生最後を迎えたときに、

「あー私の人生はすばらしかった」といえるのではないのでしょうか。